



本社工場の新社屋



コミュニケーションボイドではQ&Aの対話方式で講義

通性の高い「共通教育」のカリキュラムを作成している。講師は基本的に、高い専門知識を持った社員と、元JFEスチールの溶接のスペシャリスト、荒川武和技術顧問が担当してきたが、加えて専門性の高い建築鉄骨知識への要求が高まり、昨年は鉄骨分野に造詣が深い元・竹中工務店の護雅典典氏を顧問として迎えた。

勉強会は多目的室に集合して行うリアル参加のほか、東京支店や工事現場勤務など遠隔地の社員に向けてウェブによる参加にも対応。さらに講義内容は全て録画しているため、アーカイブでの後日またはリピート学習も可能だ。

26年度の勉強会は新築となった社屋で3月からスタート。取材当日（3月16日）は、護顧問が講師を務め、午前中は鉄骨造の仕組みについて講義を行った。そして午後からはコミュニケーションボイドに移動し、Q&Aの対話形式による、専門性の高い現場レベルのレクチャーが行われた。

テーマによっては布矢専

務も講師として登壇することもある。「まずは学ぶことの楽しさを感じてもらい、もっと深く知りたいという心を育みたい。そして教える立場になった際には、また新たな課題を発見し、改善へとつなげられるような学びのPDCAサイクルを構築できればと考えている。継続により技術者、技能者としての意識も高まっていくと思う」と期待する。学びのモチベーションを高めるといふ面で、新たな環境への変化は、この上ない大きなきっかけとなった。

◇ ◇

学ぼうとする 姿勢を応援したい

【護顧問のコメント】S

グレードファブに求められる最新の技術に対応できる人を育てなくてはならないのと、それ以上に鉄骨製作・管理のベースとなる知識と技能の伝承が重要だと考えている。水山に例えるなら、海面から突き出た部分が高度な技術力で、ここが注目されがちであるが、水面



講義をする護顧問

※藤本鉄工(新)※

新社屋設備を社員教育にも効果的に活用

モチベーション高めPDCAサイクル構築へ

来年4月で創業100周年を迎える新潟県のSグレードファブ、藤本鉄工(本社・新潟市中央区、小林輝昭社長)は記念事業として建設中だった新社屋が完成。2月24日に業務を開始したが、最新鋭の設備が整った多目的室やコミュニケーションボイドなどの新設備を、社内での「共通教育勉強会」から10年が経ち、当時、第一線で活躍していた熟練の技術者や技能者が高齢化し、

「Sグレードを取得してから10年が経ち、当時の第一線の経営計画に基づく教育方針を基軸に、各部・課で実施する分科と併せて、共

来、「共通教育勉強会」に注力している。

勉強会を運営する教育委員会の委員長、布矢孝幸専務は、2022年の就任以来、

「共通教育勉強会を企画した」(布矢専務)という。教育委員会では毎年、社

引退者も出始めている。特に若い社員に向けて、Sグレードにふさわしい技術者、技能者へと成長させることが教育委員会の大きな使命と考えて勉強会を企画した。

下の見えないところでしっかり下支えすることが重要である。建築鉄骨に約40年間関わってきた経験から、次代を担う人に与えられるものは多い。それは単に、昔はこうだったと古い常識にとらわれず、時代の変化を取り込みながら、最適解を導き出していくことが、自分にとっても勉強になり、教育の質を高めることにつながっていくと思う。新社屋が完成し、講習会場にはプロジェクトはもとより、白板に代わる手書き可能なタブレットも備わり、講習の密度がさらに高まると感じた。一方で若い人の学ぼうとする姿勢が素晴らしく、今後も成長に協力していきたい。

